家族性に発生した先天性両側尖足と思われる2例

潤和会中央病院整形外科

徳	永	純	一
久	保	真	治

Two Cases of the Suspected Congenital Bilateral Pes Equinus

By

J. Tokunaga and S. Kubo

Orthopaedic Clinic, Chuo Hospital

The patients were 8 year-old boy and his 9 year-old sister with blood consanguinity between their parents and grand parents.

Case 1. T. O. male, age 8.

Normal birth with slight varus deformity of his right ankle which healed by manual redression and three-months fixation in a plaster cast. Walking started at the age of 1 year 4 months, when his mother noticed of pes equinus of his feet which progressed by aging.

His condition was normal in general but marked bilateral equinus deformity of about 160° plantar flexion. He stood on his toes only. No other neuro-muscular disorder was observed. Lengthening of the Achilles tendons about 10 centimeter with the posterior capsulotomy of the ankle resulted in satisfactory correction of the deformity and in good standing and walking on his heels.

Case 2. Y. O. female, age 9.

Normal birth. At the age of 1 year 3 months when she started walking, equinus deformity of her feet was noticed. Deformity was less severe than that of her brother. Three centimeter lengthening of the Achilles tendons corrected the deformity.

In those two cases no cause which resulted in the equinus deformity was discovered and these deformities were noticed when they started walking. Therefore, the cases might belong to the category of congenital pes equinus.

両側尖足を呈する同胞例を経験したので報告する。

症例1 男, 8才(図1)。

出産正常であったが、生下時より右足の内反変形があり、生後1カ月よりマッサージ1カ月、その後3カ月間のギプス包帯固定にて変形は治癒した。歩行開始は1年4カ月、この頃より、踵をつけなかったと母親は述べている。その後次第に両側の尖足が増強し、5才頃、某整形外科受診、進行性筋ジストロフィー症であるので治らないと言われ、その後放置していた。既往歴には特記すべき事はない。家族歴は両親および祖父母共にいとこ結婚である。もう一代のいとこ結婚があるとの事であったが、両親の記憶が明瞭でなく、且つ戸籍調査でも追跡する事が出来なかった。同胞4人

中、姉(症例2)も同様の両側尖足変形を有する。その他の近親者には異常を認めない(図2)。

入院時所見では、全身的に異常を認めない。両下肢局所所見では、脚長差なく、大腿および下腿周径にも差を認めない。膝蓋腱反射は正常であるが、アヒレス腱反射は高度の尖足位拘縮のため検査が出来なかった。病的反射は認めない。腓腹筋の触診でも筋の性状に異常を認めなかった。右足関節は僅かに内反変形を呈するが、前足部の変形はなかった。下肢の運動性は股関節、膝関節共正常。足関節は両側共約160度尖足位を呈し、膝関節伸展位では、この肢位より背屈させる事は不能であった。膝を屈曲すると約5度程度尖足を矯正させ得る。起立、歩行は下肢外旋位をとり、

図 1

図 2

MP 関節、背屈にて5趾のみにて荷重している。

レ線像では、股関節正常、両膝関節共膝蓋骨は小さく陰影濃厚、中央部より上下に分節状の所見を呈する。両足関節は高度の尖足位を呈し、距骨は体部後半部で荷重する如く距腿関節の適合を示している。

臨床検査成績でも異常所見は認められなかった。筋電図検査は行っていない。血清クレアチンキナーゼは UV 法にて 0.8 mU/ml であった。

治療は気管内閉鎖循環麻酔下に両側のアヒレス腱延長を行ない、後方関節包切開を併用し、約 10 cm の腱延長により足関節 100 度まで、1 回の手術で矯正出来た。手術時腓腹筋より筋肉を採取し組織検査を行った。

筋の組織所見では全体的に筋線維の萎縮が認めら

れ、部分的に脂肪組織の侵入がある他、筋線維の破壊、核の位置異常、染色性異常等の所見は認められず、また神経性萎縮を思わせる所見も認められなかった。

手術後4週間のギプス固定を行ない、その後、床上にてプーリーを用いて足関節運動練習を行ない、5週後より松葉杖を使用して荷重開始、7週後には充分に踵部を接地して独歩可能となった。術後11週で退院したが、退院時の足関節運動性は、右側、自動的に100~135度、他動95~145度。左側、自動90~130度、他動85~145度であり、レ線像では立位にて、脛骨の位置が少々後方にあり、距腿関節の不適合が残っているが、接地状態も良好である、術後20週のレ線所見では、距腿関節の適合性の改善が認められ、足関節運動性も良好で、体育、遠足等も全く不自由なく可能である。

症例2 女、9才(図3)

症例1の入院時問診では、両親より申し出がなく、症例1の術後3週頃になって、もう一人同じ様な変形を有する同胞がいる事が分かり、来院させた。病歴は症例1と略々類似している。出産正常、歩行開始1年3カ月。歩行開始時より尖足に気付いていたが放置。小学校入学後は変形の増強は認めていない。

全身的には異常なく、局所々見も両側尖足以外特記

図 3

すべき事はない。尖足は症例1よりも軽く、足関節可動域は右側110~160度、左側120~160度であり、膝関節屈曲で僅かに尖足が矯正される程度であった。

レ線所見では両股関節は外反股を示す。症例1で認められた膝蓋骨の所見は認められなかった。足関節は立位で足部の前1/3部で荷重する所見を示した。

臨床検査成績は特記すべき事はない。

手術は、両側共3cmの腱延長で足関節90度まで矯正可能となった。術後4週間ギプス固定、その後運動開始、5週後荷重歩行開始、歩行開始5日目より松葉杖なしに歩行可能となる。術後7週で退院した。退院時の足関節運動は、右側、自動90~140度、他動85~150度、左側、自動85~130度、他動80~145度であり、術前の尖足変形が症例1に比して軽かったため、歩容も良好であり、且つレ線所見でも脛骨の位置も良く、距腿関節の不適合も軽度であった。

以上、血族結婚家系の同胞2例に見られた両側尖足の症例であり、治療経過の概要について述べた。

神中整形外科教科書尖足の項には Bessel-Hagen による先天性尖足の頻度は4.2%であり稀であり、更に、純粋尖足が先天性に発生することは極めて稀で、多くは内反尖足であるとされている。我々の症例が、先天性の純粋尖足であると断定することは、日整会誌索引や、J. Bone and Joint Surg の索引等、我々の調べた範囲内で症例報告の文献が見当らず、文献的考察の不備な点から出来難いが、両症例共に他の尖足を生ずる原因と考えられるものが発見出来ず、歩行開始時より尖足があり、また症例1は右足の内反変形があって治療したと言う病歴はあるが、両症例共に尖足変形が著明である点などから、先天性尖足の範疇に入れてよいのではないかと考える。

本症例は腱延長術によって一応変形の矯正が得られているが、今後、再び変形が、身体発育と共に生じて来るか否か、また距腿関節の術後の不適合がどの様に改善されて来るか、経過観察が必要であり、他日、文献の探索、考察を加えて発表したいと思う。

第39回 西日本整形災害外科学会

昭和45年6月14日(日)九州大学医学部整形外科学教室3階講堂

○印のものは末尾にその抄録を掲げる

1. 最初10年間における マーシオレート骨銀行の使用経験

佐賀整肢学園 多田 俊作
 斉田 久剛
 中島 啓雅

2. 最近の教室にて経験した骨系統疾患

鳥取大学 整形外科 上 平 用
 大谷 武
 杉谷 晃俊
 益田 紀志雄
 池田 宣之

3. ガーゴリズムの1例

足立学園 原 晃
 柴田 玄彦
 高松 鶴吉
 佐竹 孝行

4. 内反股を伴う Dysostosis Cleidocranialis の2例

久留米大学 整形外科 宮城 克史
 田中 繁徳
 田中 勝俊

5. 偽一仮性副甲状腺機能低下症(Pseudo-pseudo-hypothyroidism)と思われる1例

九州大学 整形外科 奥 江 章
 飯塚病院 整形外科 甲斐 佐
 角田 信昭

6. 筋性斜頸無処置例の観察(第1報)

長崎大学 整形外科 梶山 英彦
 藤井 徹
 丸石 学
 久芳 昭紘
 伊藤 信之